洛南タイムズ
2011年（平成23年）6月8日（水曜日）　第17365号

被災地の福島県におもちゃを届けた時の状況を報告する藤井さん（ころぽっくるの家）

被災地の子どもとつながろう

宇治ころぽっくるの家
おもちゃ届け隊が報告会

子どもの発達支援などに取り組んでいるNPO法人アジール舎「ころぽっくるの家」＝宇治市槇島町大幡、亀口公一会長＝で5日、東日本大震災の被災地にいる子どもたちにおもちゃを届けたスタッフを迎えた報告会が開かれた。

「ころぽっくるの家」は「共に生き　共に育つ　子どもたちへ！」を合言葉に3年前にオープン。発達につまずきや問題を抱える子どもを対象に児童デイサービスの活動を行っている。

亀口さんは臨床発達心理士として長年にわたって子どもと向き合ってきた。児童デイは障害者自立支援法による支給決定児童とその家族が対象だが、発達のつまずきや混乱をほぐし、早期療育で2次的障害を未然に防ぐため、「可能な限り就学で切れることがないようにしたい」と、利用年齢を概ね2歳～8歳まで幅を広げて運営しているのが特徴だ。

震災発生以来、亀口さんが気にかけているのが、震災で傷ついた子どもの心身を癒すために必要な「遊びやおもちゃ」のこと。

赤ちゃんにミルクとオムツが必要なように、小さな子どもたちは「遊びとおもちゃ」を求めている。避難生活においては子どもたちは自分が必要とする支援を求める力がない。被災直後は親がそばにいれば厳しい環境変化にも子どもはそれほど動じないが、長期化して親自身が疲弊した時には子どもの心的な傷は深くなる。だからこそ、我々が声なき声に応える支援をしなければ――と、避難所におもちゃを届ける活動を始めた。

報告会では福島県会津若松市にアジール舎からのおもちゃを届けた藤井将さん（41）＝が、現地の様子をスライドを交えながら報告した。

藤井さんは「おもちゃだけを与えても、子どもはすぐに飽きるが、一緒に遊び始めると子どもたちは少しずつ心を開いてくれる」。「何よりも子どもたちは人と関わることを求めていたように思う」と指摘。

震災を期に地域コミュニティが少しずつ崩壊し、「それまで日常だった周囲とのつながりが失われつつあることが、将来が見えない不安とあいまって、子どもの心に暗く蔭を落としているように思える」として、おもちゃというモノだけでなく、「生身の人間が関わり続けること」のありようが問われていると述べた。

【岡本幸一】

城南新報　【第三種郵便物認可】　2011年6月8日（水曜日）（日刊）

復興へ力を「どっこいしょ」

アジール舎　被災地おもちゃ支援報告

東日本大震災の被災地の子供たちにおもちゃを届けたNPO法人「アジール舎」（亀口公一会長）が5日、宇治市槇島町にある法人の活動拠点「ころぽっくるの家」で、報告会を開いた。現地に向かった法人会員の話に参加者が聞き入り、今後の被災地支援を考えた。

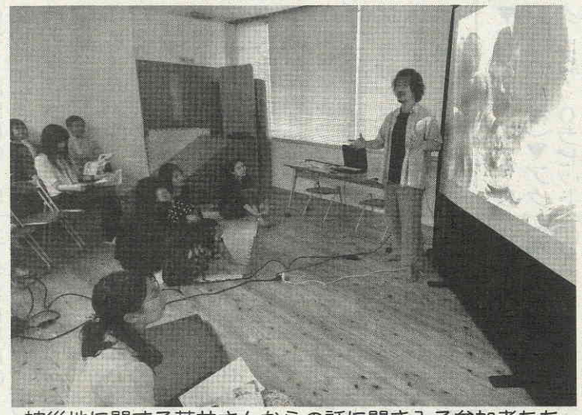
同法人は発達につまずきを持つ子供たちの療育支援を行っており、被災地の子供たちが心から求めている「遊びとおもちゃ」の大切さに注目。3月下旬におもちゃを一般募集したところ10日間で国内外から数千点が寄せられ、法人会員の藤井将さん（41）＝東京都＝が4月、仲間とともに7人で福島県会津若松市内の避難所2カ所などに届けた。

報告会は「次の展開への出発点にしたい」（亀口会長）との願いで企画。藤井さんは津波のつめ跡が残る宮城県仙台市沿岸部や南三陸町などの状況をスライド上映で説明した。

おもちゃ支援で、段ボール箱計19箱分を持参したことを伝えた。大勢の人々から寄せられたおもちゃで、当地の子供たちが遊んでいる様子も紹介した。

同行メンバーの女性は、子供たちの前で披露した「エプロンシアター」を発表し、エプロンのポケットから愛らしい人形を取り出しながら「おおきなかぶ」を上演した。

藤井さんは今後の支援について、人間や動物が協力してカブを引き抜くストーリーになぞらえ、「立場を超え『うんとこしょ、どっこいしょ』で一つの目標『復興』のためにつながらないと。何ができるか、私自身も考えたい」と力を込めた。



被災地に関する藤井さんからの話に聞き入る参加者たち